

麦の生産拡大が地域に溶けこむ 好循環サイクルの構築に向けて

■ 中讃普及センター管内「麦生産者」 ■

（中讃農業改良普及センター 大西智司 山田浩三 藤井貞吉 瀧川裕史 美馬仙治
香西 宏 村上てるみ ○長尾昌人 松本智也 渡辺悠介）

●対象の概要

中讃管内は、綾川、土器川、金倉川沿いの砂質土壌地帯を中心に排水性の良好な地域が多く、古くから良質なはだか麦の産地として麦作が盛んに行われてきた。

近年では、「さぬきうどん」用小麦としての県オリジナル品種「さぬきの夢」シリーズの登場により伝統的な県民食の原材料として再認識されたこと、はだか麦に比較して単収を確保しやすい等の理由から小麦の生産意欲が高まり、はだか麦からの転換が進んでいる。土壌条件と栽培技術の励行が相まって、平均単収・品質とも県平均を上回り、県内で最も良質な小麦が生産されている。

平成29年産の両麦の栽培面積は県下の約5割を占める約1,239haが作付されており、その内訳は、はだか麦が530ha、小麦が709haである。

●課題を取り上げた理由

麦経営は、投下労働時間が10a当たり15時間以下と少ないこと、機械化により労働強度が小さいこと、水稲と異なり水管理が不要なこと等、現状の農業従事者の高齢化や減少に対応できる有望な品目である。また、作付拡大によって、遊休農地の解消と面的な農地の維持管理が可能である。

経営所得安定対策の畑作物の直接支払交付金における数量払は、単収や品質の向上によって交付金が増える仕組みとなっており、麦の規模拡大や収量性向上によって土地利用型農業者の経営発展を図ることが容易である。

さらに、両麦とも市場から強く生産拡大が求められているという現状を踏まえ、麦生産者が例年、安定的に麦の生産を行うことによって収益性の向上や規模拡大に取り組めるよう、きめ細かな技術支援を行う必要がある。

各経営体が規模拡大を行い、麦作の成功事例として注目される存在になれば、周囲への波及効

果が期待され、新規作付者の増加につながり、最終的には地域の農地が守られる状況が構築できると考えた。

●普及活動の経過

これまで、麦作の技術指導・情報提供は、JAと連携して各地区で開催する講習会と併せて、主要な生産者への巡回指導などによって実施してきたが、講習会への生産者の出席率が低いこと、開催日が予め決まっておらずタイムリーな情報提供が困難なこと、巡回指導には物理的な限界もあることから、指導方法の改善を図る必要に迫られていた。

その様な状況の中、平成27年産から経営所得安定対策のゲタ・ナラシの交付対象者が、認定農業者、認定新規就農者、一定の要件を満たす集落営農組織に限定され、生産者が担い手に集約されたことから、より効果的な新たな指導方法を模索検討し、平成29年産からは郵送ダイレクトメールを中心とした情報提供・技術指導を開始した。

ダイレクトメールの内容は単に技術指導にとどまらず、経営所得安定対策や農地集積事業などの情報も盛り込み、規模拡大、農地集積により麦作経営の発展を促す内容となるようにした。

また、コンクール入賞者等の優良事例など、目標とすべき経営体の紹介も行った。

●普及活動の成果

平成29年産麦については、早期には種条件が整いは種のピークが大幅に早まり、麦の生育期間を通して暖かかったことから、例年になく麦の生育が大きく前進し、肥培管理も急ぎよ、追肥の回数、施用量を増すなどを行う必要が生じたが、ダイレクトメールにより時期を逃さず指導を行うことができた。

その結果、平成29年産麦については、小麦「さぬきの夢2009」、はだか麦「イチバンボン」とも、県下平均より高い1等麦比率を確保できた。

◎中讃地域の優良事例
(香川県麦作拡大コンクール最優秀賞受賞者)

経営体名	個人の部 (有)グリーンフィールド	集団の部 (農)あぐりらんど飯山
麦作付規模	小麦: 28ha はだか麦: 14ha	小麦: 38ha はだか麦: 14ha
H28播き作付拡大面積	9.8ha	6.8ha
単収	小麦: 421kg はだか麦: 337kg	小麦: 385kg はだか麦: 337kg

10ha以上に規模拡大することで、安定した収益が確保でき、コンバイン等の機械更新が余裕を持って行えるようになります。まずは10ha、さらには上記経営体のような発展を目指しましょう！

◎好循環のトライアングルで、経営の安定化！



図 麦のダイレクトメールの一部分
(優良事例と経営発展誘導)

表-1 平成29年産麦の品質状況

品種	区分	中讃地域	県下平均
さぬきの夢 2009	1等麦比率	98.9%	88.1%
	単収	360kg/10a	359kg/10a
イチバンボン	1等麦比率	98.8%	93.6%
	単収	308kg/10a	311kg/10a

平成29年産香川県麦作拡大コンクールでは、生産集団の部、個人の部ともに、当普及センター管内の生産者が最優秀賞を受賞し、麦作経営の優良な成功事例として、いずれの経営体も高い単収、品質を維持しつつ、大きく作付面積を伸ばすことができた。

これらの成功事例を参考に、管内では新たに麦作を経営の柱とした集落営農法人が29年度中に4法人設立され、着実に、麦作の優良事例の波及効果が確認できた。

平成30年産麦は、は種前から種期にかけて周期的な降雨があり悪条件となったものの、1,269haと前年産(1,238ha)以上の作付が確保された。

表-2 香川県麦作拡大コンクール
最優秀賞受賞経営体の概要

		集団の部	個人の部
経営体名		(農)あぐりらんど飯山	(有)グリーンフィールド
麦作付規模		小麦: 38ha はだか麦: 14ha	小麦: 28ha
H28播き作付拡大		6.8ha	9.8ha
単収 (一等%)	小麦	385kg (100%)	421kg (100%)
	はだか麦	337kg (100%)	-

●今後の普及活動の課題

1 米麦二毛作による生産振興

米の生産調整が廃止され、「生産の目安」に基づいた水稻の作付が30年産から行われるが、県下では、米の作付減少に歯止めがかからず、業務用米が不足する等、需要と供給にミスマッチが発生している。

今後は、採算性が担保されている経営体や稲作を行って利益を出せる経営体に、より多くの作付面積を担ってもらう必要がある。現在、麦の作付を行っている土地利用型の担い手農業者に対して、米についても重点的に作付推進を行っていく必要があり、普及センターとして経営指導や経営提案の中で米麦二毛作の推進を行っていくこととしている。

2 農地集積及び基盤整備の合意形成支援

担い手を中心とした米麦の生産振興を本格化させるには、地域の農地を効率的に集積する必要がある。また、農地の集積と併せて、基盤整備も並行して行われていく必要がある。他県と比較して基盤整備率が低く、水田一筆当たりの面積が小さく、形も不整形なほ場が多い現状では、低コスト化は図りにくい。農地の基盤整備を進めるには、地域全体の地権者の合意形成が必要になる。各担い手は、経営判断の中で地域の農地集積率を伸ばし、地域の農地を守った実績により信用力を付け、地域の担い手として基盤整備を主導するなどの役割が求められている。

地域の合意形成につながるよう、市町、農業委員会、農地機構と連携しながら各種事業等を有効に活用しつつ支援活動を粘り強く行っていく必要がある。